

第79号
2012. 1

北海道

米麦改良

麦作



平成23年産小麦の総括

お知らせ

平成23年度稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ

麦作



平成23年度全国麦作共励会審査結果



平成23年産種子粉の検査（ホクレン滝川種苗生産センター内）

会報誌「北海道米麦改良」はホームページでもご覧になれます。

<http://www.beibaku.net/>

社団法人 北海道米麦改良協会

売れる米を 低コストで 安定生産

めざそう 小麦の 品質向上

農産物検査の信頼性確保
を目指して

JA グループ北海道は一丸となって
農産物検査の信頼性確保に努めています

も く じ

麦 作	平成23年産小麦の総括	1
お知らせ	平成23年度稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ	5
麦 作	平成23年度全国麦作共励会審査結果	6

麦 作

平成23年産小麦の総括

北海道農政部食の安全推進局 技術普及課 主査 松井 克行

農林水産省大臣官房統計部が11月29日に公表した『平成23年産4麦の収穫量』によると、北海道の平成23年産小麦の秋まき小麦と春まき小麦の収量は共に前年を大きく上回ったが、平年対比では秋まき小麦96%、春まき小麦90%と平年を下回った(表1)。

秋まき小麦は「きたほなみ」に全面切り替への初年目で多収穫が期待されたが、細麦が多く期待した製品収量が得られなかった。平成22年と同様に6月2半旬以降の高温が登熟日数の短縮を招き、子実の細麦傾向につながったと推察される。生育の経過をふり返りながら今後の課題について検討した。

1 小麦作柄の経過

(1) 秋まき小麦

は種作業は、降雨の影響で遅れ、越冬前の生育量は小さかった。雪腐病は少なかったが、

融雪期・起生期ともに早くなり、十勝地域では凍上による生育不良が各地に見られた。幼穂形成期から止葉期にかけて低温と降雨の影響で、生育は遅延し、出穂期が遅れた。しかし、6月中旬以降気温が高く、成熟期が早まり、出穂期～成熟期の日数は42日間(平年46日間)と短くなった。草丈・穂数は平年並で倒伏は少なかった(表2)。

登熟日数が短かったため、全道的に細麦が多く、製品歩留は低かったものの、適期収穫の励行や入念な調製作業により品質は良好だった(表3・表4)。

(2) 春まき小麦

春まき栽培のは種期は、融雪が順調であったオホーツク地域では早かったが、上川地域は断続的な降雨の影響で、は種を断念し他の作物に転換したほ場もあった。

春まき・初冬まき栽培ともに低温と多雨で

表1 平成23年産小麦の作付面積と収穫量(北海道)

区分	作付面積 (ha)	10a 収量 (kg/10a)	前年対比 (%)	平年収量 (kg/10a)	平年対比 (%)
秋まき	110,100	430	137	450	96
春まき	9,120	260	169	288	90

注) 農林水産省大臣官房統計部発表(23年11月29日)。
平年収量は過去7年の豊凶年を除く5年平均。

表2 平成23年秋まき小麦の生育状況

振興局	播種期 (月日)	起生期 (月日)	幼穂形成期 (月日)	止葉期 (月日)	出穂期 (月日)	成熟期 (月日)	茎数(本/m)			穂数 (本/m)
							(10.15)	(5.15)	(6.15)	
石狩	9.24(遅3)	4.15(遅7)	5.10(遅4)	6.2(遅5)	6.13(遅4)	7.23(遅2)	293(67)	1,404(103)	752(99)	650(98)
空知	9.20(遅1)	4.10(遅1)	5.7(遅3)	5.31(遅3)	6.10(遅3)	7.21(遅1)	309(96)	1,450(105)	866(102)	718(97)
上川	9.13(遅4)	4.13(早3)	5.10(遅2)	6.3(遅3)	6.12(遅3)	7.22(遅1)	487(60)	1,421(119)	820(111)	732(109)
オホーツク	9.23(遅2)	4.7(早3)	5.6()	6.5(遅3)	6.14(遅3)	7.28()	240(73)	1,918(117)	893(99)	809(100)
十勝	9.24(遅2)	4.2(早5)	5.3(早2)	6.3(遅2)	6.12(遅1)	7.24(早4)	241(79)	1,674(104)	826(95)	731(93)
全道	9.22(遅2)	4.6(早3)	5.5()	6.2(遅2)	6.12(遅2)	7.24(早1)	281(75)	1,633(102)	843(99)	743(97)

注1) 各生育季節の()内の数値は平年対比の日数。

2) 茎数、穂数は北海道農政部発表の作況値。()内の数値は平年対比の百分率(%)を示す。

表3 平成22年産麦類検査実績

(道農政事務所食料部)

品 種 名	1 等 麦 比 率 (%)				
	23年産	22年産	21年産	20年産	19年産
ホクシン	69.8	49.3	49.5	82.6	88.0
きたほなみ	79.2	53.3	71.1	-	-
ホロシリコムギ	78.5	0.0	42.2	72.4	89.0
タクネコムギ	79.0	62.3	27.3	65.6	71.8
きたもえ	9.7	20.6	1.2	53.3	79.3
キタノカオリ	81.3	63.9	12.2	87.1	88.9
秋まき計	78.7	50.2	49.9	82.1	87.8
春よ恋	76.1	35.2	56.3	77.8	55.7
ハルユタカ	79.8	0.0	24.2	80.1	30.2
はるきらり	85.4	63.9	84.7	-	-
春まき計	77.4	33.7	52.4	78.1	57.9
普通小麦計	78.7	49.4	50.0	81.9	86.3

注) 23年産については、11月30日の速報値

表4 平成23年産「きたほなみ」の品質
項目別加重平均値

(ホクレン)

分析項目	23年産	22年産	基準値
容積重 (g/ℓ)	851	839	840
F.N. (sec)	409	415	300以上
タンパク (%)	10.7	11.6	9.7~11.3
灰分 (%)	1.49	1.50	1.60以下

注) ホクレン扱い分

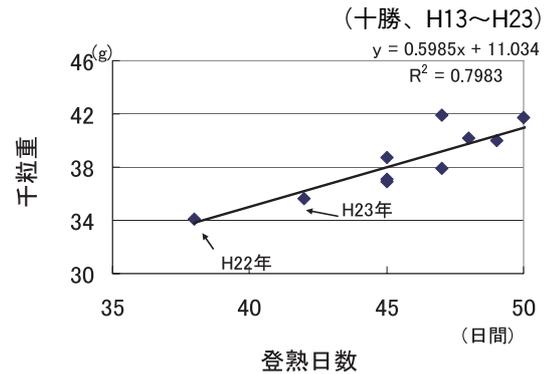


図1 登熟日数と千粒重の関係

注) 千粒重は十勝普及センター本所調べ

表5 各地区の登熟日数 (農政部農作物生育状況調査結果より)

地区名	H 23 年			平 年 登熟日数	平年差	H22年 登熟日数
	出穂期	成熟期	登熟日数			
空 知	6月10日	7月21日	41	43	- 2	37
上 川	6月12日	7月22日	40	42	- 2	36
網 走	6月14日	7月28日	44	47	- 3	41
十 勝	6月12日	7月24日	42	47	- 5	38
全道平均	6月12日	7月24日	42	46	- 4	38

幼穂形成期が遅れたが、6月下旬から気温が高く推移し、成熟期までに遅れを2~3日短縮した。出穂期~成熟期の日数は春まき・初冬まき栽培とも平年に比べ2~3日短くなり、秋まき小麦同様細麦が多かった。

2 「きたほなみ」細麦の要因

(1) 気象的要因

起生期以降の天候不順により出穂期は各地区ともに平年より1~3日遅く、逆に、成熟期は平年並~4日早まった。そのため、登熟日数(出穂期~成熟期までの日数)は、各地区ともに2~5日短かく平成22年ほどではな

いが、登熟日数が短縮され(表5)、その結果、粒重が低下した(図1)。

また、起生期から幼穂形成期(4月2半旬~5月1半旬)までの降水量が平年比182%と多雨となり、7月15日前後にも集中的な降雨があり、7月中旬は平年比177%となった。この降雨が根に対して少なからず影響したと思われる。

(2) 栽培技術的要因

「きたほなみ」は「ホクシン」に比べ1穂粒数が多く、それぞれの粒にまんべんなく光合成産物と窒素等養分を供給できなければ細麦が増加し製品歩留りが低下する。

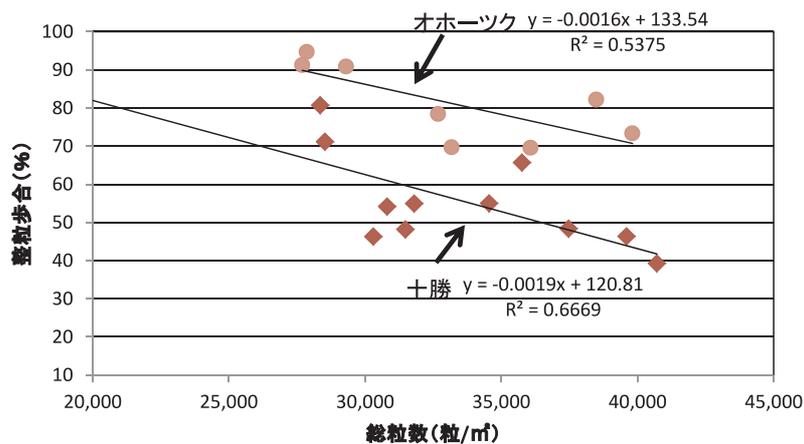


図2 平成23年産「きたほなみ」の m^2 当たり総粒数と製品歩留りの関係

(十勝農業改良普及センター本所調・オホーツク1tどりプロジェクト調べ)
注)総粒数は、成熟期の穂を大きさ別に抽出調査し、 m^2 当りに換算した値



写真1 止葉葉身および葉鞘部に発生した腐敗症状

十勝農業改良普及センター本所での調査とオホーツク地域で実施している1tどりプロジェクトの調査では、 m^2 当たり総粒数と製品歩留りには高い負の関係がみられた(図2)。従って、生育が旺盛で多収が期待されたほ場ほど、総粒数が多くその影響が大きかったと考えられる。また、越冬後の茎数が多く倒伏を懸念し分追肥を控えたほ場では、製品歩留りを更に低下させたことが考えられた。

(3) 病害的要因

道東を中心に止葉や葉鞘が腐敗する症状が7月上旬ころから急激に目立ちはじめ、早期に枯れ上がった(写真1)。この症状は平成22年は十勝地域を中心に発生し、平成23年は

オホーツク地域でも多発した。病斑部位にはミクロドキウム・ニバーレの分生胞子が確認されたが、確認できない事例もあり原因は特定されていない。

北見農業試験場の調査では、葉枯症状の葉鞘部被害穂率が多いと、製品歩留りが低下する傾向が見られている(図3)。しかし、十勝農業試験場の調査では、穂の赤かび病も併発したため、葉枯症状が収量に与える影響は明らかにはならなかった(表6)。

この葉枯症状については、次年度も調査が予定されている。

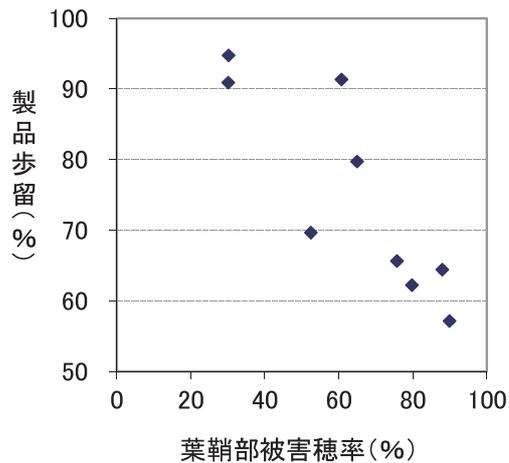


図3 葉鞘部被害穂率と製品歩留りの関係
(H23 北見農試)

注1) 病斑が葉鞘を取り巻いたものを被害穂とした

注2) 発生穂調査日：7月26日

3 今後の課題

製品歩留りを高めるためには、成熟期まで根が働くように心土破碎などの施工と有機物の投入に積極的に取り組み、透排水性の良いほ場を作ることが大切である。また、pHを適正に保持し施肥効率を高めると共に、起生

表6 葉枯れの発生と整粒率

(H23十勝農試)

葉枯の発病葉率 (%)	赤かび病の発病穂率 (%)	整粒率 (%)
9.3	23.0	95.8
14.7	25.3	95.4
20.0	32.7	96.0
21.3	15.3	95.8
25.3	26.7	95.0
30.7	26.7	93.8
97.3	53.7	88.5

注1) 葉枯の調査：7月11日(各区止葉25枚×3反復)

注2) 赤かび病の調査：7月17日(各区100穂×3反復)

期以降の施肥は、倒伏を心配せず止葉期に追肥できるよう、小麦の生育や地力を考慮した施肥管理が重要となる。さらに、生育期間を確保するためには、融雪促進に心がけ、起生期を早めることも重要である。

稲作・麦作

平成23年度稲作・麦作総合改善研修会のお知らせ

本年度の稲作・麦作総合改善研修会を、札幌市において平成24年3月2日（金）午後開催いたします。

受講者は、稲作・麦作の生産者をはじめ、全道の農協および市町村の担当者、関係機関・団体等の方が対象で、受講料は無料です。

正式なご案内につきましては、別途（2月上旬頃）、各地区米麦改良協会および新聞ならびにホームページ等でご連絡させていただきます。例年同様、優良事例発表や特別講演などを企画しておりますので、多数の受講をお待ちしております。

日 時：平成24年3月2日（金） 13時00分より（12時30分受付開始）

場 所：ホテルモントレエーデルホフ札幌

札幌市中央区北2条西1丁目 TEL (011) 242-7111



平成22年度稲作・麦作総合改善研修会
(平成23年3月4日（金）ホテルモントレエーデルホフ札幌)

平成23年度 全国麦作共励会審査結果

平成23年度全国麦作共励会中央審査委員会(委員長:(独)農業・食品産業技術総合研究機構 寺島一男理事)が12月21日(水)に開催され、北海道ブロック推薦の加藤優氏(小清水町)が「農林水産大臣賞」に、水沢平誠会(美瑛町)が「全国農業協同組合連合会会長賞」を受賞されました。

中央表彰式は、平成24年2月21日(火)(東京都千代田区ホテルルポール麹町)で開催されることになっております。

なお、各賞の受賞者は下記のとおりです。

平成23年度 全国麦作共励会受賞者名簿

(敬称略)

I. 農家の部

賞名	氏名	住所
農林水産大臣賞	加藤 優	北海道斜里郡小清水町北斗(北海道ブロック)
全国米麦改良協会会長賞	永安 武久	愛媛県伊予市八倉(中国四国ブロック)
全国米麦改良協会会長賞	北原 靖章	佐賀県杵島郡江北町惣領分(九州ブロック)
全国農業協同組合中央会会長賞	(有)サンライス青木 代表取締役 青木 靖浩	富山県下新川郡朝日町横水(東北・北陸ブロック)
全国農業協同組合連合会会長賞	荻野 浩	埼玉県本庄市児玉町蛭川(関東ブロック)
日本農業新聞会長賞	安藤 重夫	岐阜県本巣市十四条(東海・近畿ブロック)

II. 集団の部

賞名	集団名	所在地
農林水産大臣賞	農事組合法人室岡営農組合 代表者 佐々木 忠之	岩手県柴波郡矢巾町室岡(東北・北陸ブロック)
全国農業協同組合中央会会長賞	箱川下分営農組合 代表者 真木 壽憲	佐賀県神埼郡吉野ヶ里町箱川(九州ブロック)
全国農業協同組合連合会会長賞	水沢平誠会 代表者 矢野 司	北海道上川郡美瑛町水沢(北海道ブロック)
日本農業新聞会長賞	農事組合法人 本戸営農組合 代表者 小林 行夫	岐阜県安八郡輪之内町本戸(東海・近畿ブロック)

9月 上旬～下旬



播種

10月

11月 上旬～下旬



雪腐病防除

12～2月 越冬

3月 上旬～下旬



融雪促進

4～5月

6月 上旬～下旬



防除

7月 上旬～下旬



収穫

8月

良質米麦の出荷目標



一等米 100%
整粒歩合80%以上確保
精米蛋白質含有率6.8%以下
仕上がり水分14.5～15.0%
入れ目1%以上確保
全量種子更新



一等麦 100%
低アミロ麦皆無
DON暫定基準値1.1ppm
以下でできるだけ低いこと
赤かび粒混入限度 0.0%
異臭麦皆無
十分な入れ目の確保
全量種子更新

農産物検査事業の方針

公平、公正、迅速に行う。
必要な技術的能力の維持・向上に努める。
客観性・公平性から他部門からの影響排除。
制度の適正な運営に寄与する。



発行所

社団法人 北海道米麦改良協会

〒060-0004 札幌市中央区北4条西1丁目 共済ビル5階 TEL 011-232-6495 FAX 011-232-3673

【業務部】E-mail beibaku@basil.ocn.ne.jp

【検査部】E-mail beibaku-kensa@carrot.ocn.ne.jp

北海道米分析センター

〒069-0365 岩見沢市上幌向町216の2 TEL 0126-26-1264 FAX 0126-26-5872

E-mail bun1@plum.ocn.ne.jp

<http://www.beibaku.net/>